

# 〈驚き・感慨〉を表すモノダ文の構造変化

— 近世以降を中心に —

北村 雅 則

## 1. はじめに

本稿では、北村（2001）～（2007）において示した現代日本語におけるモノダ文の考察結果をベースとし、モノダ文の中でも特殊な振る舞いをしているように見える〈驚き・感慨〉の用法<sup>\*1</sup>について、近世以降のものを中心に論じる。

言語は変化するものであるという観点からすれば、モノダのような、いわゆる「文法化」の流れに乗るものは、考察を現代語という共時態の範囲に留めるよりも、言語変化を意識した歴史的研究と関連させた方がより有効な文法記述となるであろう。しかし、日本語文法の研究全般において、現代語研究と歴史的研究は相互に関連性を持つことはそれほど多くなく、それはモノダ文においても例外ではない。北村（2001）～（2007）は、現代日本語におけるモノダ文の研究であったが、本稿はその先を目指し、〈驚き・感慨〉を表す近世以降のモノダ文と現代語のモノダ文の構造を対照し分析を試みる<sup>\*2</sup>。歴史的研究から見えることを現代語研究の成果に援用しようというのが大きなもくろみであるとともに、現代語研究の側から、歴史的研究にどのようにコミットできるかを示す一つの試論と位置づける。

### 1. 1 考察の前提

はじめに、本稿の前提となる拙論の概要について確認しておく。モノダ文には、「この本は近所の本屋で買ったものだ」のようないわゆる名詞述語文とは異なる助動詞的な用法があるとされる<sup>\*3</sup>。モノダ文が多様な解釈を有する根拠として、従来の研究では、モノダの助動詞化（文法化）が想定されてきたが、モノダの助動詞化とは構文的な観点からどのように捉えられるのかについては、それほど分析されて来たわけではない<sup>\*4</sup>。その点に関し、北村（2001）では、モノダ文「PハQモノダ」においてQが一回性の出来事を表すばあい（Qと連動して、Pが個別・具体的であるばあい）、いわゆる助動詞的なモノダ文としての解釈ができないというこ

とを指摘した\*<sup>5</sup>。(1a)が助動詞的な用法、(1b)が名詞述語文である。

- (1) a. 拍手は賞賛の気持ちを表すものだ。〈一般的傾向〉  
b. 太郎への拍手は(優勝したことの)賞賛の気持ちを表したものだ。  
〈代用語〉

逆に、Qが複数回性および性質・状態性、Pが総称性という条件を整えると、すべて助動詞的な〈一般的傾向〉の解釈が可能となる。

- (2) a. エアコンは、電気を大量に消費するものだ。  
〈代用語〉 / 〈一般的傾向〉  
b. 昔の子供は、悪いことをしたら、親に殴られたものだ。  
〈回想〉 / 〈一般的傾向〉  
c. 最近マンションは、LDKが広いもんだ。〈驚き〉 / 〈一般的傾向〉  
d. 公衆の面前で、感情的な発言は、控えてもらいたいものだ。  
〈希望〉 / 〈一般的傾向〉

(1)(2)から次のような一般化を導くことができる\*<sup>6</sup>。

- (3) a. Qの複数回性もしくは性質・状態性が、助動詞的なモノダ文の構造的な必須条件である。  
b. Qが複数回性もしくは性質・状態性であるモノダ文は〈一般的傾向〉が構造的に導かれるデフォルトの解釈となる。

拙論では、〈驚き〉の用法に関して、構造的にどのようなパターンがあり、この条件にどれくらい合致するのかをまだ詳細に検討していなかった。本稿では、まず、現代日本語における〈驚き〉を表すモノダ文の構造を記述し、(3)の条件にどの程度適合するのかが確認する。結論を先取りすれば、〈驚き〉は(3)の条件に適合するというモノダ文としての共通性を有する反面、〈一般的傾向〉とは異なる〈驚き〉それ自体が有する構造的特徴も存在するのである。現代日本語における〈驚き〉を表すモノダ文の構造的パターンとその特殊性について、近世以降の〈驚き〉を表すモノダ文の構造パターンと対照することによって、その特殊性について記述

し、〈驚き〉を表すモノダ文の変化について概観する。

## 2. 現代語における〈驚き〉を表すモノダ文の基本構造

モノダ文における〈驚き〉という解釈が、いわゆる名詞述語文の解釈（本稿では(1b)に示すような〈代用語〉）と異なるのは明白である。したがって、〈驚き〉を表すモノダ文にも、(3)の条件があてはまる蓋然性は高いと予想できる。しかし、モノダ文とは関係なく、〈驚き〉という感情が生じる（〈驚き〉という解釈が生じる）場面を考えてみると、〈驚き〉とは基本的には目の前に起きた状況・事態によって生じるものであり、眼前の一回性の出来事を前提とするという点で、複数回性、性質・状態性を前提とする助動詞的なモノダ文の構造的条件にそぐわないのも事実である。

(4) 【1日に3回、交通違反で捕まって】こんなことは、めったに起きないもんだ。

(5) 【父親が子供からプレゼントをもらって】うれしいもんだ！

(6) 【子供が親に反抗的な言動をして】親に向かってよくそんな口を聞くもんだ。

(4)(5)(6)は〈驚き〉を表すモノダ文の例であるが、これらを〈驚き〉と解釈するためには、例えば【 】に示すような眼前の事態・状況がなければならないだろう。ここから、〈驚き〉の用法に関しては、眼前の1回性の事態が必須であるといったいわば言語外的な条件と、それとは相反して、Qが複数回性、性質・状態性でなければならないという言語内的な条件を内包していることが分かる。

本稿では、〈驚き〉の用法を考察するにあたり、モノダ文の他の用法との関連性（(3)の条件との整合性）を重視し、言語内的、つまり〈驚き〉を表すモノダ文の構造に着目する。用例を概観した結果、〈驚き〉の用法の構造パターンは、(4)(5)(6)に挙げた3タイプに集約できるようである\*7

(7) 《ア》 PハQモノダ (→ (4))

《イ》 Qモノダ (→ (5))

《ウ》 (P {ハ/ガ}) 副詞+Qモノダ (「副詞」が必須) (→ (6))

以下、《ア》《イ》《ウ》の構造におけるQの性質・状態性について、用例を挙げながら記述する。

## 2. 1 《ア》PハQモノダ

このタイプは、言語形式から導き出されるデフォルトの解釈は〈一般的傾向〉である。しかし、【 】に示したような〈一般的傾向〉に反する事態に遭遇した際に、語用論的意味として〈驚き〉の解釈となる。これは坪根(1994)が「一般性の裏返し」と述べるものに相当する。

- (8) a. 【あきれてしまうような言い訳をしているのを周りの人が聞いて】  
どうせ言い訳するなら、もっとましなことを言うもんだ！  
b. ??どうせ言い訳するなら、この場でもっとましなことを言うもんだ！

このタイプは、(3)の条件に典型的に合致するものである。例えば、(8a)におけるQに該当する「言う」は、この場において「ましなことを言う」という1回性の動作を表すのではなく非アクチュアル(性質・状態性)であると考えられるが、(8b)では、「この場で」という、眼前の状況を補う語を加えたことによって、「言う」がこの場での1回限りの動作となり、不自然な文となる。よって、このタイプは、眼前の状況・事態によって解釈が〈驚き〉となるが、構造的には、Qは複数回性の出来事、もしくは、回数を捨象して、質を表さねばならないということが分かる。

## 2. 2 《イ》Qモノダ

このタイプは、(5)における現前の状況を言語化し、例えば「子供からプレゼントをもらうのはうれしいもんだ」のように表すと(5)と同じ解釈にはなりにくい\*<sup>8</sup>ことから、主題Pを必須としないという点で《ア》とは異なる振る舞いを見せる。

しかし、〈驚き〉の解釈となる場合には、眼前の状況・事態を必須とするという点は共通である。(9)(10)を見てみよう。(9)(10)はいずれも、【 】に表すような眼前の状況・事態なしには成立しない\*<sup>9</sup>。

- (9) 【並んでいた列に横入りされて】腹立たしいもんだ。

(10) 【久々に会った孫を見て】大きくなったもんだ!

主題Pを必須としないという点で《ア》とは異なるこのタイプだが、述語部分「Qモノダ」の構造については、〈一般的傾向〉と共通性を有していると思われる。〈一般的傾向〉の用法については、北村(2005)で、新屋(1989)の文末名詞文に相当する蓋然性が高いと述べた。文末名詞文とは(11)のような「PハQRダ」(Q=名詞修飾部、R=主名詞)という構造を持つ文であり、P・Q・Rの意味関係が(11b)のように「PノRガQダ」になる点、RはPの側面を表すだけであり、(11c)のように、実際の文の解釈には、Pに含意されるという点が特徴的である。〈一般的傾向〉のモノダ文も文末名詞文と同様の性格を有すると考えられる\*10。

(11) a. [P神谷直吉] は [Q返事に窮した] [R様子] だった。(新屋(1989))

b. [P神谷直吉] ノ [R様子] ガ [Q返事に窮した(窮していた)]。

c. 神谷直吉は返事に窮した(窮していた)。

(12) a. [P赤ちゃん] は [Qよく寝る] [Rもの] だ。

b. [P赤ちゃん] ノ [Rもの] ガ [QPよく寝る]\*11。

c. 赤ちゃんはよく寝る。

これをふまえ、(9)(10)を見ると、例えば、(9)は「もの(=横入りされたこと)ガ腹立たい」、(10)は「もの(=孫(の身長・体))ガ大きくなった」と把握できるが、「もの」は眼前の形ある対象物ということだけではなく、眼前の状況・事態といったコト性を表すものであると考えられる。

このように、《ア》《イ》における「Qモノダ」の部分が「[主名詞]ガ[名詞修飾]」という関係と捉えられるならば、「主名詞」と「名詞修飾」は、意味的には、「[主名詞]は[名詞修飾]だ」のような指正文の関係にあると考えられる。それは、「Qモノダ」のQの部分には、形容詞または状態動詞である非対格自動詞は入るが、非能格自動詞や他動詞は入りにくいことが証左となる。

(13) a. 【虫眼鏡で紙に火がついて】燃えるもんだ!

b. 【虫眼鏡で紙に火がついて】\*燃やすもんだ!

c. 【走り幅跳びで好記録が出て】??飛ぶもんだ!

非対格自動詞とは、近藤(2000)において、主語が他動詞の目的語(対象)と近

い性格を持つものとされ、形容詞は非対格自動詞に分類されている。形容詞と非対格自動詞の接点は、主語（～ガ）が対象を表すという構造的な部分にあるが、非対格自動詞は基本的に状態性を表す点でも類似しており、(3)とは矛盾しない。

以上の通り、《ア》と《イ》の「Qモノダ」の部分については共通する性格が認められるわけだが、《イ》のタイプに類似するものとして、(14)のようなものがある。(14 a)は「PガQモノダ」という構造でQは非対格自動詞が入るもの、(14 b)は「～ヲQモノダ」という構造でQには他動詞が入るものである。これらも、(9) (10)と同じく、(14 a)では【CMが流れると子どもが泣きやむ】、(14 b)では【西瓜に砂糖をかけて出した】という現実の発話現場において、《驚き》が表される。

- (14) a. (NOVAうさぎについて) CMが流れると、ぐずっていた子どもが泣きやみ、くぎ付けになるほどというから、すごいキャラが現れたものだ。(佐賀新聞2003.2.23)
- b. 今日西瓜をふるまうのに、わざわざ砂糖をふりかけていたが、西瓜には西瓜の味があるものを、つまらぬことをしたものだ。(薄田泣重『艸木虫魚』青空文庫)

しかし、《ア》では《驚き》が言語形式によって明示的に表されるのではなかったのに対して、(14)では、「すごい」「つまらぬ」といった語によって、話し手の予測・想定とのズレが表されるという点が特徴的である。事実、「すごい」「つまらぬ」がなければ非文となること、文末のモノダがなければ《驚き》を表せないことが、(15)から明らかである。

- (15) a. \*CMが流れると、ぐずっていた子どもが泣きやみ、くぎ付けになるほどというから、( φ )キャラが現れたものだ。
- b. #CMが流れると、ぐずっていた子どもが泣きやみ、くぎ付けになるほどというから、すごいキャラが現れた( φ )。
- c. \*今日西瓜をふるまうのに、わざわざ砂糖をふりかけていたが、西瓜には西瓜の味があるものを、( φ )ことをしたものだ。
- d. #今日西瓜をふるまうのに、わざわざ砂糖をふりかけていたが、西瓜には西瓜の味があるものを、つまらぬことをした( φ )。

以上から、(14) が〈驚き〉を表すと解釈できるのは、発話現場における現実の事態だけではなく、その事態について、なんらかの「程度が甚だしいことを示す表現」と文末のモノダの共起によると言える。つまり、「(Pガ) Qモノダ」という構造におけるQは、語彙的、もしくは、共起要素によって性質・状態性が保証され、(3) の条件に適合することが確認できる\*12。

## 2. 3 《ウ》(P {ハ/ガ}) 副詞+Qモノダ (「副詞」が必須)

このタイプは、副詞 (典型的には「よく」) との共起が必須である。解釈としては、「①頻度が多いことに対する〈驚き〉 (= 《頻度》)」「②数量が多いことに対する〈驚き〉 (= 《数量》)」「③程度が甚だしいことに対する〈驚き〉 (= 《程度》)」「④眼前の事態に対する〈驚き〉 (= 《眼前の事態》)」がある。以下、例を挙げる。

(16) 【また、服を汚して帰ってきた子供に】いつもいつも、よく汚すもんだ…。  
(①《頻度》)

(17) 【大漁に釣れた魚を見て】たくさん釣れたもんだ！ (②《数量》)

(18) 【花火大会で】音がよく響くもんだ！ (③《程度》)

(19) 【反抗してきた子供に向かって】親にむかってよくそんな口をきくもんだ。  
(④《眼前の事態》)

(16) の《頻度》、(17) の《数量》の解釈については、文脈上、動作の多回性・複数回性を前提としており、Qの複数回性、性質・状態性は、必然的に保証される。

一方、(18) の《程度》、(19) の《眼前の事態》については、Qに入る動詞に制限がある。《程度》の解釈の場合は、(20) に挙げるように、Qは非対格自動詞に限られる。これは(21) のように、複数の振る舞いをする動詞「滑る」を例にすると、非対格自動詞のばあいと他動詞のばあいでは解釈が異なることから確認できる。

(20) a. 【花火大会で】音がよく響くもんだね！

b. 【聴診器で心臓の鼓動を聞いてみて】よく聞こえるもんだね！

(21) a. 【新品のスキー板を使ってみて】

よく滑るもんだね！ (「スキー板が滑る」= 非対格自動詞：《程度》)

- b. 【急斜面を滑り降りる人を見て】あの人あんな急斜面をよく滑るもんだね！

(「あの人ガ急斜面ヲ滑る」=他動詞：《眼前の事態》)

また、《眼前の事態》の場合は、(22)のように、Qには、基本的には非対格自動詞は入りにくい、(23)のように構造が非対格自動詞と同じである可能表現については入りうる。

- (22) 【赤い服を着ている花子を見て】

＃よく目立つもんだ。(非対格自動詞：《程度》)

- (23) a. 【まんじゅうを大量に食べている太郎に対して】

そんなにまんじゅうばかりよく食べられるもんだ。《眼前の事態》

- b. 【プロのサッカー選手が相手ディフェンダーを鮮やかに抜き去るのを見て】

あんなに簡単によく抜けるもんだ！《眼前の事態》

また、このタイプのQには、非能格自動詞・他動詞も入りうるが、基本的に可能表現と置き換え可能である。

- (24) a. 【猛暑の中、マラソンの練習をする太郎を見て】

こんな暑い中、よく「走る／走れる」もんだよ。

- b. 【プライベートなことをペラペラ話すのを聞いて】

そんなことよく「話す／話せる」もんだよ。

以上、《程度》と《眼前の事態》の解釈におけるQに入る動詞には制限があるものの、状態動詞である非対格自動詞が入ることや、副詞との共起により、解釈上、Qの性質・状態性が保証されることが分かる。

## 2. 4 〈驚き〉を表すモノダ文の構造パターンの整理

以上、(7)に示した〈驚き〉を表すモノダ文の構造パターンにおいて、(3a)に挙げた条件、つまり、それぞれのQが複数回性、もしくは、性質・状態性でなければならないという点についての観察の結果をまとめておく。



(25) 《ア》 PハQモノダ

1回性の出来事を表す表現と共起できないことから、Qの複数回性、性質・状態性が保証される。

《イ》 (Pガ) Qモノダ

Qが形容詞、状態動詞である非対格自動詞である点、Qが形容詞・非対格自動詞以外のばあい、なんらかの程度表現との共起が必要である点からQの性質・状態性が保証される。

《ウ》 (P {ハ/ガ}) 副詞+Qモノダ (「副詞」が必須)

Qが形容詞、状態動詞である非対格自動詞である点、Qが形容詞・非対格自動詞以外のばあい、副詞との共起が必要である点からQの性質・状態性が保証される。

3. 近世における〈驚き〉を表すモノダ文

以上の現代語の観察をもとに、近世における〈驚き〉を表すモノダ文を記述する。資料は、国文学研究資料館の本文データベース検索システムを使用し、近世の全ジャンルの中で、口語的性格が強い「断本大系」を選択した。

3. 1 モノナリ文とモノダ文

古代語において、断定辞は「ナリ」が基本であったことを考えると、モノダ文とモノナリ文の間には類似性が見出されることは当然予想されることである。予備調査として、モノナリ文を調査してみると、モノナリ文は、〈一般的傾向〉の用法は観察されるものの、それ以外は〈代用語〉であった<sup>\*13</sup>。一例として、(26)には〈代用語〉、(27)には〈一般的傾向〉の例を挙げる。

(26) a. 唐の李杜といふ人ハ、天下に名をえしものなり 「秋の夜の友」

b. 神社のまつりに、神輿の前に掛る面の名を王鼻といふ。きはめて鼻たかく、色あかきものなり 「狂哥咄」

(27) a. 牛ハ暑気はなはだしくして熱き時ハ、かならず喘ぐものなり「理屈物語」

b. ぶすいな人や遠国の人に、此粋むきのはなしや当世むきの咄をしてハ、一かうにがてんせず、かへつて不興になるものなり。「軽口五色昏」

嘶本大系という口語的性格が強い資料においても、モノナリ文は、〈代用語〉と〈一般的傾向〉しかないのに対し、モノダ文（モノジャ文）には、本稿で考察の対象とする〈驚き〉だけではなく、〈希望〉など他の用法も観察される<sup>\*14</sup>。

- (28) a. 冬ハ日かげをありくものだ。〈一般的傾向〉「福茶釜」  
b. どこぞへいつて、今すこしのミたいものだ。〈希望〉「笑府商内上手」  
c. 世の中にハ飛ンた変ナやつらも有るものだ。〈驚き〉「管巻」

モノナリ文、モノダ文、いずれにおいても、〈一般的傾向〉のようにいわゆる助動詞的な用法に関しては、(3a)に挙げたQが複数回性、または、性質・状態性でなければならないという特徴が見出せ、この点に関して現代語と共通の性格を有すると言える。

### 3. 2 近世における〈驚き〉を表すモノダ文

第2章では、現代語におけるモノダ文が(3)の条件に適合し、〈驚き〉の用法は、(7)に挙げたような3つの構造に分けられることを見てきたが、ここでは、近世における〈驚き〉を表すモノダ文の構造的特徴について概観する。

まず、Qの性質・状態性についてであるが、〈驚き〉を表すモノダ文（モノジャ文）のうち、Qが語彙的に性質・状態性を表さない、つまり、他動詞または非能格自動詞だったものは、26例中2例だけであった。

- (29) a. なんと、あの水馬といふものはおつなものだ。かたびらひとつぐらいで川を渡るが、若も今に軍といつて、具足を着たら、ねつから、ゑけぬものでハあるまいが、その時は、とふ云あんじだろうといへば、ソバカラ、おぬしや、ばかな事をいふものだ。「春袋」  
b. 【むし笛の音について】きめうなものもでるものだ。「富來話有智」

(29 a) の傍線部「いふ」、(29 b) の「でる」は、確かに他動詞であるが、これは、《イ》で挙げた(14 b)に類似する構造であり、(29 a)は「ばかな事」、(29 b)は「きめうなもの」のように、共起要素により、Qの性質・状態性が保証される。

(29) 以外の例は、(30)に挙げるように形容詞または非対格自動詞であり、語

彙的に性質・状態性が保証されるものである。

- (30) a. 安永と云物をふるまおふか。それハめづらしいものだ。「近日貫」  
b. なるほど、桜にもいろいろな奴があるものだ。「古今秀句落し嘶」

近世における〈驚き〉を表すモノダ文においても、Qが性質・状態性でなければならぬということについては、現代語と大きな差はないと言える。

### 3. 2. 1 現代語におけるモノダ文との構造的相違

以上、近世におけるモノダ文のQについて、現代語と差違が見られないことを見たが、Q以外の構造的な点については差違が2点見出せる。1点目は現代語では、《イ》Qモノダのように、主題を必須としないタイプが存在するが、近世の例においては、こうしたものは非常に稀であるという点である。主題が明確に存在しないものは、(31)の一例だけであった。しかし、(31)の類例として、(32)のような「PハQモノダ」の形はそれなりに見出せる。

(31) また隣でふうふけんくわをはじめたそうだ。こまつたものだ。「富貴樽」

(32) a. △ シテ、代物ハいかほどでござる

△ 八十五両

△ ソレハ大ぶん高いものだ。「新口花笑顔」

- b. ふたりつれ立て、さくらの馬場（はゞ）へゆき、サアしやく馬にのつて見よふでないかといへば、コリヤおもしろからふ。したが、おらハつゝに乘たことがない。ハテ、しづかにのつて見やれと、むりにのせて引だす。これハこわいものだと、もゝちに成つてのつてゆく。

「聞上手」

- c. △おに きもをつぶし、いやもふ、わしどもハげこなり。それにあかいわしハだいきらいでござる

△さけ七 ホイ。それハこまつたものだ。「はなし句応」

2点目は、副詞を必須とする《ウ》（P {ハ/ガ}）副詞+Qモノダがないということである。ただし、これについては、中世における〈驚き〉を表すモノジャ文の中に、(33)のように副詞と共起する例があることから、副詞との共起例が近世

にないというわけではなく、資料的な制約による可能性が高い。

- (33) a. 昔から「賣り言葉に買う言葉」とは、よう言うたものじゃなあ。「大名狂言 入間川」  
b. ようもようもそのように揃うて忘れられたものじゃ。「女狂言 千切木」

1点目に関し、中世においても、主題が明確に存在しないと考えられる例は、管見の限り存在しないようである。したがって、近世においては（中世も含めて）、主題が有標の形で現れないものよりも、「PハQモノダ」のように、主題を明示する方が優勢だったと推測できる。むろん、現代語において主題Pが現れないのは、〈驚き〉と〈回想〉の用法だけであり、デフォルトの用法である〈一般的傾向〉では、（主題が省略されることがあるとはいえ）必須要素である。近世における〈一般的傾向〉を表すモノナリ文についても、(27)に挙げたようにそれに関しては同じである。

以上の観察から、(3b)に挙げた、現代語における助動詞的なモノダ文のデフォルトの用法が〈一般的傾向〉であるというのは近世も同じであり、解釈の点でも構造的にも「PハQモノダ」がデフォルトであった可能性が高いと言える。〈驚き〉の用法については、現代語では3つの構造パターンが抽出できたが、近世では、「PハQモノダ」という構造を基本としており、「Qモノダ」のように主題が存在しないタイプは極少数であった点が現代語との大きな相違点である。

### 3. 3 近代における〈驚き〉を表すモノダ文

近代における〈驚き〉の用法について、青空文庫を資料として検索した結果を簡単にまとめておく。近代における〈驚き〉を表すモノダ文は、(34)のように、現代語に見られる3つの構造パターンが存在し、現代語と大きく異なることはないようである。(34)のいずれの例についても、(25)に当てはまることを確認しておく。

- (34) a. 漢学の先生はさすがに堅いものだ。《ア》『坊っちゃん』  
b. 気の毒なものだ。《イ》『三四郎』  
c. 困ったことを言ひだしたものだ。《イ》『道化の華』  
d. ふしぎなこともあるものだ。《イ》『丹下左膳』

- e. 嘘の天才！ よくもそんな、白々しい口がきけるものだ。《ウ》『新ハムレット』

近代においては、(34 b) のような主題がない〈驚き〉の用法や (34 e) のような副詞と共に起る例も散見されるようになる。比較する資料の相違から、(34 b) (34 e) のような例が一般化したとは単純に結論付けられないが、現代語においては、こうした例は一般的であること、および、近世から現代までの歴史の変遷を考慮すると、こうした例の使用範囲の拡大が背景にあったと推測することはあながち間違いではないように思われる。

### 3. 4 現代語における〈驚き〉を表すモノダ文の変化

最後に、現代語における〈驚き〉を表すモノダ文の変化について触れておく。現代語における〈驚き〉の用法は、基本的に (25) にまとめたような構造と捉えてよいが、一部、これには当てはまらない例が出てくる。それは、《イ》Qモノダにおいて、主題が存在しないばあい、Qは形容詞、または、非対格自動詞であるという点について、例外的に、他動詞や非能格自動詞も一部認められるという点である。

- (35) a. Opera やるもんだなあ！ 「CNET Japan」を見てびっくりしました。  
オペラのCEOが「Opera 8の100万ダウンロード達成」で、水泳による大西洋横断に挑戦しているらしいです。  
([http://yatsunet.weblogs.jp/kumaburo/2005/04/opera\\_\\_1081.html](http://yatsunet.weblogs.jp/kumaburo/2005/04/opera__1081.html)  
2006.7.6アクセス)

- b. ご主人Mはなんと肉が苦手。という事でビビンバを選択。これにも挽肉は入っていて、苦手なご主人Mは おそろおそろ口にしてみたところ、「結構、美味しいかも」という感想に。食べてみるもんだね。  
(<http://www.geocities.jp/gonta2459/seoul1.htm> 2006.7.6アクセス)

- c. 城田は汚れた作業服の体全面に荒れた風を受けながら、仲間・紅蘭の乗る翔鯨丸を見送る<sup>\*15</sup>。

「……おお、飛ぶもんだな」

設計、計算、製造。全てを手作業で行った城田も実際に飛ぶ翔鯨丸を見つめてそうつぶやく。(http://www.tcn.ne.jp/~sigeak/taki/taki\_

(35) の各例は、他動詞・非能格自動詞の例である。(13) の例や (25) のまとめでは、他動詞や非能格自動詞のばあい、程度が甚だしい表現や「よく」の類と共起しなければ〈驚き〉を表さないことを示した。しかし、上記の例は、程度の甚だしさや「よく」などと共起することなく〈驚き〉を表す。もちろん、これらの例も、コンテキストから話し手の予測・想定とズレが生じる事態が起きていることは確かであるが、以上論じてきた現代語におけるモノダ文の構造からは異質な形として立ち現れてくる。近世・近代はもちろんのこと、新潮文庫の100冊における〈驚き〉の例を検索しても、これらのような〈驚き〉の例は現れないが、現在、インターネット上にはこうした例が実際存在するし、内省によっても不自然さは感じられない。確かに、新潮文庫の100冊とインターネット上のブログなどでは、ジャンル・資料性（時代差も含めてよいか）の相違があることは事実である。しかし、(35) のような例から、Qが語彙的に、または副詞という共起要素により、性質・状態性を保証する構造から、コンテキストへの依存度を高め、主題を必須としない構造、および、Qの性質・状態性をコンテキストから保証するという構造へと拡張している様が見て取れる。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、本稿では、(3) に挙げたモノダ文全般に対する一般化に対して相反するように見える〈驚き〉の用法について、現代語の記述を基点とし、近世から現代までを構造的特徴を概観することによって、〈驚き〉の用法の構造的変化を捉えた。

近世・近代・現代と、助動詞的なモノダ文については、基本的にQが複数回性または性質・状態性でなければならないという制約は共通しているようであるが、それに反するように見える〈驚き〉の用法の構造的特徴については、時代ごとに相違が見られた。

近世では、モノダ文全般が「PハQモノダ」という構造がデフォルトであり、〈驚き〉に関しては、Qが形容詞や非対格自動詞であることにより、語彙的に性質・状態性が保証されることが多かった。それが、近代に入り、副詞との共起による複数回性、性質・状態性の保証されるものや、「Qモノダ」のような、いわば一語文的に、眼前の状況・事態といったコンテキストに依存し、主題部分を表さないタイ

ブが勢力を拡大した。現代語においても近代と同じような傾向にあるが、変化が観察できる部分もある。一語文的な「Qモノダ」におけるQは、基本的には形容詞や非対格自動詞でなければならないが、コンテキストに依存し、他動詞・非能格自動詞が入りうるものも現れた。これは現代という時代区切りの中でも比較的新しい例であると思われる。

本稿は、現代語研究で得た成果について、歴史的研究の観点からどのように関わることができるのかを探る一試論という位置づけであったにもかかわらず、歴史的研究の側から見れば、調査対象の少なさ、選定した資料性の問題等、本来ならば考えなければならない点について配慮が行き届かず、不十分な考察に留まってしまった。

しかし、いわゆる形式名詞述語文の歴史的变化を単なる記述で終わらせず、変化を動態として捉え、その背後にあるメカニズムについてに分析しようという研究が、徐々にではあるが進みつつある\*16。モノダ文が形式名詞述語文の1つである以上、モノダ文だけに通用する一般化は、汎用性という点で意味を見出しにくくなってしまふ。今後、本稿で不十分であった点、また、試論の域を出なかった点について、他の形式名詞述語文の研究とも関わりながら、さらなる解明を目指したい。

#### 〈謝辞〉

本稿は、2007年5月、関西大学において開催された日本語学会春季大会での口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。遠藤先生と出会ったのは、十年前のこと、私が学部三回生の時であったと記憶している。先生の御専門とは全く関わりのない現代日本語文法を専攻し、しかも、先生の下を離れ他大学院へと去ってしまった、いわば「先生」不孝であった私に対して、いつも気にかけてくださった先生のお心遣いと今回の機会を与えてくださったことに深く感謝する次第である。

#### 〈注〉

- \* 1 〈驚き・感慨〉の解釈としては、具体的には《感心》《あきれ》などがあるが、本稿では〈驚き・感慨〉のすべての解釈を〈驚き〉と称することにする。
- \* 2 本稿では、構造を統語論的な意味だけに限定せず、構成要素の意味特性のような、解釈に関わる文法的な特性を広く「構造」と捉える。
- \* 3 モノダ文の諸用法については、北村（2001）を参照のこと。名詞述語文である〈代用語〉〈解説・説明〉、助動詞的な用法として〈一般的傾向〉〈回想〉〈当為〉〈驚き〉〈希望〉がある。拙論は、モノダの助動詞化を積極的に肯定

する立場ではないが、名詞述語文とは解釈上異なるモノダ文の存在があることは事実であり、その意味で、それらを助動詞的な用法と呼ぶ。

- \* 4 構文的な観点からの考察としては福田（1998）などが挙げられる。
- \* 5 （1）では〈一般的傾向〉を例に挙げるが、〈回想〉など他の用法についても同様の傾向にある。
- \* 6 （3）は拙論の議論をまとめたものである。この一般化に必要な議論について北村（2001）～（2007）を参照のこと。
- \* 7 新潮文庫の100冊、青空文庫から採取した用例による。
- \* 8 〈一般的傾向〉の解釈が自然であり、《ア》に該当すると考えられる。
- \* 9 これらがいわゆる一語文としての構造を持ちながら異なる点は、モノダ文は、話し手の予測・想定を必要とし、それと現実の事態がずれるばあいの〈驚き〉しか表せないということである。不意に肩を叩かれて「びっくりした！」というような突如として感じた〈驚き〉を「びっくりしたもんだ！」のように表せない。詳しくは北村（2007）を参照のこと。
- \* 10 「形式名詞+ダ」の文法化について、三宅（2005）にも文末名詞文との関連性が指摘されている。
- \* 11 文末名詞文の述語名詞は、西山（2003）の非飽和名詞に相当し、それ自体では値を取ることができない名詞である。（12b）はこの形では意味をなさないが、モノには、非飽和名詞として文中の他の要素によって指示対象が決定されるばあいもあることを考慮すると、この操作における（12b）のような形で表された文は意味を成さないというだけであり、モノダ文と文末名詞文の類似性が否定されるものではない。これについては、北村（2007）で論じた。
- \* 12 「(Pガ) Qモノダ」も、主名詞「もの」(現前の事態)と名詞修飾部Qは、「[もの]ガ[程度表現+Q]」という関係になっていると考えられ、《ア》と《イ》をつなぐ周辺領域に位置するものと認められる。
- \* 13 参考までに数値を示しておく、86例中16例が〈一般的傾向〉であった。
- \* 14 モノダ文は151例あり、そのうち26例が〈驚き〉であった。モノジャ文は5例が〈驚き〉であった。
- \* 15 「翔鯨丸」とは飛行機だと思われる。
- \* 16 宮地（2007）では、ハズダ・ワケダが、名詞述語文から助動詞的な振る舞いへと変化する様について記述している。



## 《出典》

嘶本大系 = 「秋の夜の友」「狂哥咄」「軽口五色昏」「福茶釜」「理屈物語」「笑府商  
内上手」「管巻」「春袋」「富来話有智」「近日貫」「古今秀句落し嘶」「富貴樽」  
「新口花笑顔」「聞上手」「はなし句応」

日本古典文学大系 = 「大名狂言 入間川」「女狂言 千切木」

新潮文庫 = 新潮文庫の100冊 CD-ROM

青空文庫 = 『坊っちゃん』『三四郎』『道化の華』『丹下左膳』『新ハムレット』

## 《参考文献》

- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』 159
- 坪根由香里 (1994) 「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』 84
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』 ひつじ書房
- 福田嘉一郎 (1998) 「現代日本語におけるモノダの構文と意味」『熊本県立大学文学部紀要』 4 - 1
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化－内容語と機能語の連続性をめぐって－」『日本語の研究』 1 - 3
- 宮地朝子 (2007) 「筈からハズへ、訳(分け)からワケへ—名詞が文法化するとき—」平成18年度名古屋大学文学研究科公開シンポジウム「拡張し変容する「日本語」」報告書
- 北村雅則 (2001) 「モノダで終わる文—連体修飾部の時間的限定性からの考察」『名古屋大学国語国文学』 88
- 北村雅則 (2004) 「モノダ文の解釈を決める諸要因」『名古屋大学国語国文学』 95
- 北村雅則 (2005) 「本性・一般的傾向を表すモノダ文」『名古屋大学国語国文学』 96
- 北村雅則 (2007) 「モノダ文における述語名詞モノの役割—文末名詞文の構造との関連性—」『日本語の構造変化と文法化』 青木博史編著 ひつじ書房